



今日も本探し



koberyol

長い人生には三つの出会いがあるという。

一つは「人との出会い」。

二つ目は「自然との出会い」。

三つ目は「本との出会い」である。

今回は三つ目の「本との出会い」に焦点を絞り、わたしの思うところを書いてみたい。

昭和のはじめ頃、わたしの魂を夢中にした本との出会い、それは「徳富蘆花（とくとみ・ろか）の小説だった。明治・大正時代に活躍した小説家で、「自然と人生」とタイトルされた随筆におさめられた「ひぐらし」の一篇には多大なる感銘を受けた。

「ひぐらし」とは、むろん蝉のひぐらしのことであり、蘆花は次のようにそれを表現している。蘆花はこう書いている。

『ひぐらしのいっせいさやかに銀鈴（ぎんれい）をふるるが如し』

まるで銀の鈴がふるがごとく、涼やかな「ひぐらし」の声が耳のそばで聞こえてくるようではないか。

今年の夏、わが家の庭でも「ひぐらし」は夏の終わりに毎日のように聴くことができた。ひぐらしの声を耳にするたび、蘆花の一節が脳裡に鮮やかに甦り、わたしを在りし日の思い出へと誘うのである。

もうかれこれ七十年もむかしにさかのぼることになるが、当時少年だったわたしは、蘆花が描くところの「ひぐらし」の情景を求めてあちらこちらを彷徨した記憶がある。

蒸し暑い残暑の中、さまよい歩いたところ、ひぐらしと遭遇したのは、東京・杉並区内の大宮公園であった。

空は夕焼けで、赤々と雲は映えていた。黒々とした杉の梢は、大きな大きな「のこぎり」の刃のようなギザギザのシルエットとなって赤く焼けた空にくっきりとした姿をみせていた。その情景に、ひぐらしの声がかさなったのである。まるで神秘的な鈴が空気をふるわせているように、その音はわたしの耳に聴こえたのだ。

わたしには、まさに蘆花の「自然と人生」の描写が迫力をもって眼前によみがえるように感じられた。そして、わたしは思ったものだ。

蘆花がわたしに与えた感動は偉大なものであったことを。

蘆花の言葉はまた、いまもわたしの心に焼きつき、そしてまた、わたしのみならず多くの人に感銘を与え、永遠に生きているのだ、と。

わたしが青年だったころ、本を読むのは教養を高める入り口とばかりに岩波文庫を中心に読書に励んだ。

学生時分には通学路が学生の街・早稲田から高田馬場駅までのあいだだったから、その境界にある古本屋を毎日、覗いて歩いたものだ。かなり歩いたと記憶する。まことに本を探すとは体力のいるものだ。

あれから半世紀以上の時間が経過した。この年齢になっても、いまだわたしは本に執心している。いつの時代にも購入資金の心配はあったが、「心の財産をふやす」ことは少しも苦にはならないから、時間があれば本探しは現在でもつづけていて、よくぞ七十年間もやってきたものだと思う。

最近、歴史書を揃えた。なぜ、揃えたかというと、上から俯瞰して自分の物差しとしての「正論」を強く持ちたいと思ったからである。

常々感じていることは、歴史上の人物の物語を知り得ることで、自分の存在や苦しみがなんと小さいこととわかる。

さらにはまた、歴史の事実は動くものではないので、ひととおり歴史書を揃えていれば、孫や子ども世代でもその書籍はなんらかの役に立つかもしれず、財産になると考えられ、自分でも良いことをしたと自画自賛している。

つぎにわたしが考えるところの「本選びの五つのポイント」を紹介して、筆を擱きたい。

- ① 購入する本を見つけたら、“まえがき”を読み、執筆の目的、著者の考え方、本文の構成を知る。
- ② つぎに目次をみる。本の内容が具体的に把握できるから、その時点で手にとった本が自分に向いているか、考える。
- ③ 末尾で著者の専門や略歴をみる。
- ④ 発行者（出版社）と発行期日がいつ頃の著作かをみる。
- ⑤ 帯や広告文をみる。

などを基準にしてわたしは本を選んでいる。参考にしていただければと思い、紹介をさせていただいた。

